

新聞を使った静岡の教育活動や授業展開事例の研究

静岡大学 学生支援センター
宇賀田研究室（静大フューチャーセンター）
指導教員：教授 宇賀田栄次
参加学生：上村崇、池田康太、中垣乃彩

1 要約

令和3年3月に発足した「島田市人材育成プラットフォーム」のつながりをきっかけに、今年度、島田樟誠高校特進コース2年生クラスとの連携によりパンの商品開発に取り組むこととなった。高校生や大学生が関わる商品開発は珍しいものではなく、毎日のように新聞各紙で記事が掲載される。今回の商品開発の参考になる情報を探すなか、「新聞」が効果的な情報源になるだけでなく、商品開発活動を通じた学習のヒントを与えるものになるのではと考えた。

本研究を通じて、「世の中の流れ」「現場・現物主義」「記者の目」「文章構成」という新聞が持つ特徴を商品開発活動に生かすことで高校生の自律的な学びを深めることがわかった。商品開発活動は継続中だが、高校生は読者投稿をはじめ新聞への関わりも続いている。

2 研究の目的

本研究は、高校生による商品開発活動において、新聞が有効な教材になるのか検証とともに成果をまとめることを目的とする。また今回の取組により新聞を活用した探究学習、および高大連携によるプロジェクト学習のモデル化も目指す。

3 研究の内容

令和4年2月にアイザワ証券（静岡大学との包括連携協定先）を通じて、大河原運送株式会社が経営する島田市内のパン屋（シルベスターからくり時計前店：以下、シルベスター）の商品開発を大学生と連携して行えないかとの相談が報告者（指導教員）宛にあった。報告者は「島田市人材育成プラットフォーム」（事務局：島田市戦略推進課）の座長を務め、島田市内の高校と産業界との連携による次世代人材育成に取り組んでいることもあり、大学生だけでなく地元高校生との連携による商品開発を提案し、島田樟誠高校とのご縁により、同校特進コース2年生クラスを中心とした商品開発に取り組むこととなった。

(1) 商品開発の背景

2月、大河原運送株式会社の大河原社長、佐野部長から今回の相談に関する聞き取りを行った。シルベスターは、JR島田駅に近い帯通り時計台前にある1979年創業のベーカリーである。創業以来、昔ながらの親しみのあるパンのほか、季節ごとに新しい種類を加えるなどしているが、大河原社長によれば「目玉商品がない」「フツーすぎる」との印象があり、新しい商品を地元の大学生や高校生と開発することで若い客層にも販路が拡大できる期待があった。島田樟誠高校の協力については、「とてもありがたい」（大河原社長、佐野部長）との回答があり、本学の学生や教員がサポートする形で進めることとなった。



シルベスターの外観と店内（島田樟誠高校生徒撮影）

(2) 島田樟誠高校での検討開始

島田樟誠高校では特進コース2年生の担任である小宮幸代教諭が生徒たちの指導や支援を担当した。小宮教諭によれば3月まで学校内の購買でシルベスターのパンが販売されていたもの

の、他の商品とまとめて販売されていたことから、生徒のほとんどは店名を知らなかったという。また、島田市内の全高校の購買で販売されてきており、学校ごとに人気商品があることなども分かった。創業からの「定番商品」やそれを改良した商品が多数あることなども共有し、クラス全員で商品開発への話し合いを進めた。

そのなか、管理栄養士を目指している生徒Aとその友人Bが中心となり、「防災」をテーマとした12月の東北地方への修学旅行を見据えた商品開発ができればよいのではという意見があがった。

新聞の生かし方①：世の中の流れ

高校生による商品開発活動では、商品を開発することが目的化しかねない。新聞で同様の事例を探しながら、活動そのものの目的や期待を理解・整理することができる。

「静岡新聞データベースplus日経テレコン」の「記事検索」により、「商品開発・高校生」に関わる記事を検索したところ、2010年前後から新聞への記事掲載全体が増えており、日本経済新聞地方版は2015年以降、掲載が減っているものの、静岡新聞では掲載が増えている状況が分かった。多くの記事からこれらの事例が「地域活性化」を期待しているものであることや2009年以降、高校商業科に「商品開発」という科目が設置され、商業高校などを中心に取組が広がったことが分かった。日本経済新聞での掲載が減少したのは、記事の新規性がなくなったからではないかと推察した。

「静岡新聞データベースplus日経テレコン」による「商品開発・高校生」の記事検索

検索期間	関連記事ヒット数	うち日本経済新聞地方版掲載数	うち静岡新聞掲載数
2000/4/1～2005/3/31	104件	22件	7件
2005/4/1～2010/3/31	159件	53件	20件
2010/4/1～2015/3/31	157件	51件	54件
2015/4/1～2020/3/31	146件	35件	74件
2020/4/1～2022/12/31	93件	18件	50件

(3) 大学生とのアイデア整理

6月、上記の二人の生徒、静大フューチャーセンターの学生、小宮教諭、報告者でオンラインによる打合せを行った。生徒からは「地域活性化」につながるよう「子どもや年長者も美味しく、楽しく、ワクワクするような防災食を開発したい。島田市特産のお茶を取り入れたい」との意見があがった。それに対して大学生からは「防災パンがどのように地域活性化につながるのか」「お店が期待しているものなのか」「防災食として“ビスコ”（お菓子）などもありパンよりも手軽である。どのように差別化するのか」などの質問があがった。生徒たちは切り返すことができないまま、会議は終了した。

新聞の生かし方②：現場・現物主義

新聞記事のほとんどは記者が現地へ行き、現物を見て記事にまとめている。生徒たちは、お店に足を運ばず、自分たちのアイデアだけで商品開発を進めようとしていたことに気づき、自ら後日お店に出向いた。お店の藤本代表にも挨拶をし、「目玉商品の開発に関わりたい」という思いを伝え、買って来たパンをクラス全員で食しながら改めて意見を重ねた。

クラスからは以下のような意見があがった。

○保存期間を延ばすためには容器が重要。お店は容器にこだわっているわけではないから「防災パン」は向いていないのではないかな。

○シルベスターさんのパンはとても美味しいパンだから、「防災パン」にするよりも元あるパンを活かして何か別のパンを開発した方がいいのではないかな。

生徒たちは改めて高校生が商品開発に関わるものの意味やお店の立地や現在販売しているパンなどのことを踏まえ、地域活性化につながるよう検討していくことを整理した。

7月、2回目のオンライン打合せを行い、商品の方向転換を確認するとともに、さらに多様な立場からの意見を取り入れるため、「フューチャーセンター」を高校内で行うことにした。「フューチャーセンター」は多様な立場の方々对未来志向で対等に考えや意見を述べるのできる場であり、静大フューチャーセンターの大学生や卒業生が場づくりのファシリテーターを務めている。生徒たちは「フューチャーセンター」に参加する方々にこれまでの経緯などを分かりやすく説明できるよう、再度、お店の代表者へのヒアリングを行うことにした。

新聞の生かし方③：記者の目

新聞では、記者の目を通した記事がまとめられている。いうまでもなく、記者は自分が書きたいように記事をまとめるのではなく、読者が取組の実際を理解しやすいよう記事をまとめ、その記事が地域や社会にどんな影響を与えていくのかを想像しながらまとめているはずである。生徒たちによる今回のお店への再訪問・ヒアリングは、「フューチャーセンター」に参加する方々を想像し、「どのようにしたら理解してもらえるか」を念頭において進められた。生徒たちが「フューチャーセンター」当日に参加者に説明した内容は以下の通りだった。

<p>1.お店のこと 商店街について</p> <p>①.どのような客層が多いですか？ 年配の方、会社員、子育て世代</p> <p>②.できれば来てほしい客層はありますか？ 母数を増やしたい（特に主婦）</p> <p>③.どのようなお店を目指していますか？ できたてを提供できるお店</p>	<p>2.パンのアイデアについて</p> <p>①.お店「一押し」のパンは何ですか？ ・この夏、売りたい「サマーオレンジ」 ・定番はユーフォーパン</p>  <p>②.パンのこだわりはありますか？ できたて</p>
<p>2.パンのアイデアについて</p> <p>③.どのような系統のパンを販売したいですか？ (菓子パン系・惣菜系など) 甘いパンがよく売れているから 甘いパンを売りたい</p> <p>④.どのような新商品を目指すか？ 定番+島田のもの (形で島田を表しても良い)</p>	<p>3.「目玉商品」が完成した後の未来について</p> <p>①.今までの宣伝は上手くできていましたか？ 宣伝が上手にできていない と思っている</p> <p>②.SNSの利用についてどのように考えていますか？ やりたいとは思っているが 店員も含め上手く使えない</p>

(4) フューチャーセンターでのアイデア活性

7月下旬、島田樟誠高校会議室において「フューチャーセンター」を開催した。高校生や大学生のほか、市内外から社会人など総勢26名での開催になった。生徒たちによる説明の後、グループに分かれ、ファシリテーターから示されるキーワードをもとに自由に意見交換を行った。多くのグループから、種類の多いお店の特徴も生かし、みんなで「シェア」できる小さめのパンの詰め合わせなどもよいのではないかとアイデアがあった。

その後、クラスでの話し合いが続けられているが、本活動と並行して、高校の同クラスでは新聞への読者投稿を積極的に行うよう小宮教諭が指導しており、これまで多くの生徒の投稿が掲載された。自分の意見に責任をもち、発信することを通して生徒たちの自律性が養われていると考える。



フューチャーセンターの様子

新聞の生かし方④：文章構成

多くの新聞では「社説」が掲載されている。記事は「事実」と「解釈」（記者の目）によってまとめられているが、「社説」には「事実」「解釈」を根拠にした「主張」がある。論理的な文章の典型例であり、受験の小論文対策にも活用されている。小宮教諭によれば、「フュー

チャーセンター」以降の話し合いでは、多様な考えを尊重する雰囲気がクラスに広がり、発言が活発化したという。また、単なる思い付きのアイデアではなく、自分なりの根拠をもとにした意見交換が多くなった印象があるという。

4 研究の成果

(1) 当初の計画

当初は、今年度中に開発した商品の販売まで進め、高大接続によるモデル授業として実施する計画だった。

(2) 実際の内容

新型コロナの影響や高校と大学とのスケジュール調整がスムーズにいかなかったこともあり、アイデアの活性化までにとどまった。新聞の活用については小宮教諭を通じた生徒への指導・支援となった。

(3) 実績・成果と課題

新聞が持つ4つの特徴を活動のヒントにすることによって、「地に足がついた」商品開発活動が進められたと実感する。生徒たちの思考力、行動力が高まり、学校生活や進路活動においても自律的・主体的に取り組む様子が増えたと小宮教諭は実感している。なかには今回の活動を通じて、具体的な進路を考え始めた生徒もおり、次年度は中心となって本活動を進めたいとの申し出があった。商品開発という探究学習をきっかけにして、生徒や学生の成長を共通成果とできるよう、継続して取り組んでいく。

(4) 今後の改善点や対策

高校と大学間でのスケジュール調整を工夫し、計画通り進められるようにしたい。

5 課題提出者への提言

今回の研究を通して、新聞が持つ4つの特徴は、商品開発を含めた高校での探究学習における活用が期待できる。探究学習は、①課題の設定、②情報の収集、③整理・分析、④まとめ・表現というプロセスを繰り返すが、学習開始時だけでなく中間の振り返りなどでも活用することができれば、学びの深まりにつながる。その際、さらに大学が新聞を活用して高校の探究学習をサポートする立場になれば、高校の教員の負担削減にもつながり、また進路選択にも成果をつなげることができる。

6 課題提出者からの評価

今回の研究はまだ目的達成途中ということで、最終的な評価はできないが、本研究の目的が「商品開発活動において、新聞が有効な教材になるのか検証とともに成果をまとめ」というのであれば、それに沿った具体的な活動に期待する。

【新聞を使った教育活動で期待されるもの（静大フューチャーセンター案）】

- ① 「新聞」が効果的な情報源になるだけでなく、商品開発活動を通じた学習のヒントを与えるものになると理解する。
- ② 「世の中の流れ」「現場・現物主義」「記者の目」「文章構成」という新聞が持つ特徴を理解し、商品開発活動に生かす。
- ③ 高校生の自律的な学びを深める。
- ④ 高校生の新聞への関わりを続ける。（読者投稿）など

商品開発について、生徒たちはどこから始めてよいかわからない印象を受けた。新聞を商品開発のツールとして生かすのであれば、一例として日経金曜コラム「ヒットのクスリ」や日経MJ（マーケティングジャーナル）など、商品開発記事を継続的にスクラップする活動などを通して、新聞が実際にヒット商品を生み出す武器になることを実感していただけたらと思う。

（日本経済新聞社）